

自己の一貫性と正当化が引き起こす錯覚

アメリカの社会心理学者レオンフェスティンガーが提唱した認知的不協和理論は、自己の一貫性と正当化への動機付けが、私たちの認知や行動を変容させることを体系的に説明した理論として、後の心理学の発展に多大な影響を与えたことで知られている。

(1) 不十分な正当化実験

認知的不協和理論(cognitive dissonance theory)の基本的枠組みは、図1のように、人の心の中に、相容れない複数の認知要素(知識や信念、態度、行動など)が生じると、そこには不快な緊張状態(不協和)が引き起こされ、人はそれを低減するように動機づけられるというものである。

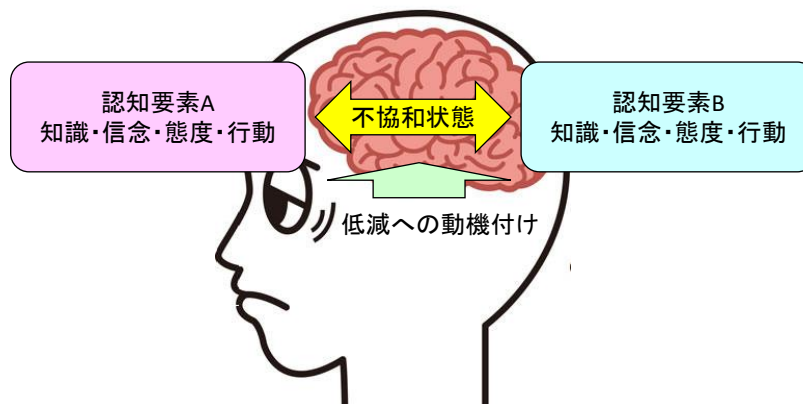
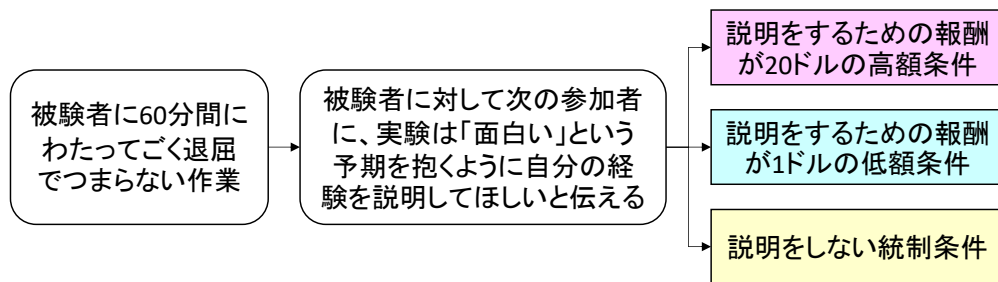


図1 認知的不協和理論の基本的な考え方

この理論のきっかけとなったフェスティンガーとカールスミスによる強制応諾に関する実験を説明し、不協和とその解消が意外な態度変化につながるメカニズムを説明する。図2のように、この実験に参加した大学生たちには、まず60分間にわたって、ごく退屈でつまらない作業が課せられた。そしてその課題が終了した後、「次の実験参加のために待っている参加者がいるので、実験は面白いという予想を抱くように、その人に自分の経験を説明して欲しい」と依頼した。この実験はこうした予想の効果を調べるもので、本来は実験者の一人が説明するところだが、その人の都合が悪くなってしまい、代役としての説明を依頼されたのである。実験参加者はそれを受け入れて、待機している学生に、実験がとても面白かったという説明をし、学生はそれを信じて実験室に赴いてみせた。実際にはかなりつまらない作業だったので、これは嘘をついたことになる。そして、この実験では嘘の説明をするための報酬が高額の20ドル条件と、低額の1ドル条件、および説明をしない統制条件があった。

このあと、実験参加者達は、先に取り組んだ課題が面白かったか、科学的に重要だと思うか、などの印象を別室で問われ、この評定値が分析の対象となった。各条件の結果から、1ドル条件の実験参加者たちは課題の面白さや、重要性などを、他の条件よりも高く評価したことが示された。つまり報酬が低い方が退屈な作業を面白く感じる、という一種の認知的錯覚が引き起こされたのである。



	1ドルの低額条件	20ドルの低額条件	統制条件
課題の面白さ	1.35	-0.05	-0.45
実験への再参加希望	1.20	-0.25	-0.62
科学的重要性	6.45	5.18	5.60

数値が大きいほど評価の程度が大きい
 範囲 上2段 -5~0~+5 下段 1~10

図2 フェスティンガーとカールスミスの実験手順と結果

この実験結果を認知的不協和理論は次のように説明する。まず課題はつまらなかったという認識と、心ならずも嘘の説明をしてしまったということは、実験参加者に不協和状態を引き起こす。人はこの状態を不快に感じ、低減しようと動機づけられる。だが、嘘をついたという行動は取り消すことはできない。であれば、もう一方の、退屈だったという印象が変わることでこの不協和は低減されるのである。ただし、20ドルの高額報酬を得たということは、実験のために嘘の説明をしてもやむを得なかったものとして自分の行為を十分に正当化することができる。そのため、自分の印象変化によらずとも不協和は低減できる。一方で、低額の報酬では、嘘をついたことが正当化できない。そのために印象の変化が強く起こったのである。この不十分な報酬による正当化の研究からは、私たちが、報酬のないボランティア活動に誇りを持って取り組むことができる理由や、内発的な動機付けが報酬を得るとかえって損なわれてしまう理由の一端がうかがえる。

(2) 認知的不協和理論の枠組み

愛煙家にとって「タバコが肺がんの原因」という知識は当然不協和を引き起こす。これを低減するために最も好ましいのは「タバコをやめる」という片方の認知様要素の変更だ。だが、これは簡単ではない。その場合は、もう片方の「タバコが肺がんの原因」という脅威をなんとか始末しなければならない。そのために、タバコ有害論には欠陥があるという情報を探し、逆に害を忠告する情報は極力避けるといった偏った情報探索を行ったり、「排気ガスの方がはるかに危険だろう」と考えたりすることで要素の重要性を操作する。さらには「愛煙家でとても長生きをしている人がいる」と言った新しい要素の付加も行われる。不協和状態にある人が、このような特徴的な情報探索や評価を行うことは、繰り返し観察されてきた。喫煙者の過半数は、自分は「適度な」喫煙者であって吸いすぎているという主観的な解釈を行う。

中小企業診断士 山戸 昭三

令和2年2月2日作成